



第8205号

2024年11月28日(木)

プーチンは冷戦終結の象徴を撃った

エコノミスト 西谷 公明

もうすぐ冬が来る。秋にぬかるんだ大地は凍り、やがてそこに雪が降る。塹壕(ざんごう)の土は凍りつき、兵士も、トラックも戦車も動きが鈍る。その冬が間近に迫ると、夏の攻勢は下火になるものだ。だがしかし、この冬は違う。

◆ 勢いづくロシア、士気衰えるウクライナ

戦場は今、陣取りゲームの最後のキャンペーンに入っている。アメリカ大統領選の結果は、両軍の士気に明暗を分けた。ロシア側は勢いづき、ウクライナ軍の士気は衰えかけている。

ロシア軍はウクライナ東部のドンバスで前進し、8月にウクライナ軍に占領されたロシア西部のクルスク奪還を目指して攻勢をかける。英エコノミスト誌(11月12日号)は、ウクライナ国内における厭戦(えんせん)ムードの広がり、ゼレンスキー大統領の求心力低下を報じている。

与えられた時間は、アメリカの政権が移行する新年1月20日までと決まっている。その後ウクライナでは、5月に大統領選が実施されるだろう。戒厳令下、大統領の任期は延長され、最高会議議員の選挙も延期されてきた。だが、トランプ次期政権が、この先もそれを容認するとは限らない。ゼレンスキー大統領自身も、いずれ進退を問われるだろう。

◆ 旧ソ連の名門「ユジマシ」攻撃の意味

バイデン政権末期のアメリカと、イギリス、フランスの両現政権は、ウクライナに供与した長射程兵器によるロシア領内への攻撃を容認した。

ロシアは、最新の極超音速中距離弾道ミサイルを発射して、ウクライナ中部ドニプロのミサイル工場「ユジマシ」に、マッハ11を超える速さ(ウクライナ国防省情報総局発表)で撃ち込んで、それに応じた。そこはかつて、大陸間弾道ミサイル(ICBM)の75%を設計・製造していた旧ソ連屈指の名門工場だ。今はウクライナ国防省が欧米から先進的な部材を調達して兵器を造っているという。

◆ 賢者はどこへ行ったのか

1997年夏のある日、私はそのユジマシにいた。核を搭載可能なロケットの解体作業を視察するためだった。ウクライナは米英露の3カ国と交わした「ブタペスト合意」(94年12月)で、経済支援と引き換えに核兵器を放棄することを受諾した。3国はウクライナの主権と領土の一体性を保障した。それにもかかわらず、ロシアは2022年2月、その約束を破りウクライナへ侵攻した。

工場の中庭へ出ると、ウクライナ国旗と並んで星条旗が風を受けて翻っていた。翌日には、ワシントンからZ・ブレジンスキー元大統領補佐官が訪れることになっていた。

ロシアの最新鋭ミサイルは、冷戦終結後のシンボルとも言うべきその兵器工場を直撃した。プーチン大統領がユジマシを標的に選んだことは、ウクライナのゼレンスキー政権だけでなく、アメリカのバイデン政権に対する強烈なメッセージだったに違いない。

賢者の不在を嘆かざるを得ない。これ以上危ない領域に踏み込まないことを願うばかりである。

(にしたに・ともあき)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003